

「全鍍連」 2018年2月号 理事長のよこがお

福井県表面処理工業組合 理事長 黒田 一郎(アイテック(株) 代表取締役会長)

「日本のものづくりに思う」



当社は福井県の眼鏡産地にあり、メガネのメッキを主たる業務として産地の発展とともに成長をさせていただいた。然し乍ら2000年度をピークとして今日では産地の生産高は当時の約40%にまで縮小した。当社はメガネのメッキを専門で行っていたが、市場の縮小とともに新規の市場を開発し、売上高及び雇用の維持を図るべくメガネ以外のメッキや眼鏡の企画販売、更には切削工具であるソーワイヤの開発販売などに横展開を進めてきた。

そうした中で一時はデジタル家電関連の表面処理加工で当社の売り上げの半分近くの売り上げを作り上げていたが、リーマンショック以降一気に国内における家電関連の生産が一気に中国をはじめとする海外へとシフトし、3年余りで当社の売り上げの40%を失うこととなった。まさに市場が蒸発したといった感じであり大きな痛手を受けた。その後徐々に新たな事業も軌道に乗り今日を迎えているわけだが、新たな事業として当社の柱の一つに育ってきた切削工具であるソーワイヤ事業において、この2-3年で市場が国内から消えて中国へシフトしてしまった。技術の開発であれ事業の開発、更には商品の開発には5年-10年と人・物・金をつぎ込み開発をしてきたわけであるがあまりにも市場の変化が激しくまさに厳しい現実と直面していると思わざるを得ない。

私は社業は7年前に社長を息子にバトンタッチし現在は福井県表面処理工業組合理事長や鯖江商工会議所会頭など外向きの仕事に専念している。当社が所在する福井県鯖江市はメガネ枠の生産をはじめ医療器具をはじめとする小物精密金属加工などが盛んなものづくりの町である。幸い町の人口も増えており元気な町として全国的にも注目を浴びる鯖江市ではあるが、現実には企業数・雇用数・工業出荷高などは漸減傾向にあり違った光景が見えてくる。企業のトップであれ機関のトップの責任として若者に将来の夢を如何に語っていくかという責任があると思っているのだが、なかなか将来のビジョンが描けないというのが日本の現状ではないだろうか？

今、第四次産業革命の入り口に我々は立っているとされるが、今後の変化は加速度的に変わっていくものと思われる。「AI・ビッグデータ・IoT・ロボット・シェアリングビジネス」など我々を取り巻く経済環境が激

変している・中国では 11 月 11 日の独身の日にアリババの通販で一日の売り上げが 2 兆 5 千億円を上回り、その 8 割は当日中に配送されたとか、無人コンビニ「ビンゴボックス」が 6 月に事業をスタートさせ 4 か月余りで 200 店舗を超え、向こう一年で 5,000 店舗を開設するなど報道されている。凄まじい変化である。こうした世界の現実が意外と知られていない。そして気が付いた時には負け組になっていたという事にならないようにしなければならない。「日本の力・メッキの力」をモットーに我々が日本のものづくりを支えているという自負の下に日本だから、日本でなければといったイノベーションを先導し技術力・商品力・開発力・事業力などに磨きをかけていきたいものである。若い人たちに夢とビジョンを語り継ぐために。